

Title	生活変動と「ライフスタイル」
Sub Title	The concept of "life style" and life dynamics
Author	岩田, 若子(Iwata, Wakako)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1988
Jtitle	哲學 No.87 (1988. 12) ,p.203- 218
JaLC DOI	
Abstract	In this paper, the concept of life-style will be redefined and reformulated through examining Max Weber's "Lebensfuhrung". This article is composed of two parts. In the first, it is clarified that his "Lebensfuhrung" has two aspects: maintaining the social structure (Japanese version of it, "seikatsu-yoshiki") and changing it (Japanese version of it, "seikatsu-taido"), and that they are mutually related. Secondly it is traced how the theory of lif-style has been developped, and the life-style is redefined from the viewpoint of life-system. The life-style is a patterned ethos, motivated by his own "life-needs" and directed by his own "life-value", according to which an actor or agent should choose "life-relationship" and "life-resources". As his life-style is collectively shared, it becomes a factor of social change. When the life-styles in the "life-world" are incorporated into the present social system, then a social transformation process initiated by the actor or agent of life-style will be terminated.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000087-0203

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

生活変動と「ライフスタイル」

岩 田 若 子*

The Concept of “life style” and life dynamics

Wakako Iwata

In this paper, the concept of life-style will be redefined and reformulated through examining Max Weber's “Lebensführung”.

This article is composed of two parts. In the first, it is clarified that his “Lebensführung” has two aspects: maintaining the social structure (Japanese version of it, “seikatsu-yoshiki”) and changing it (Japanese version of it, “seikatsu-taido”), and that they are mutually related. Secondly it is traced how the theory of life-style has been developed, and the life-style is redefined from the viewpoint of life-system.

The life-style is a patterned ethos, motivated by his own “life-needs” and directed by his own “life-value”, according to which an actor or agent should choose “life-relationship” and “life-resources”. As his life-style is collectively shared, it becomes a factor of social change. When the life-styles in the “life-world” are incorporated into the present social system, then a social transformation process initiated by the actor or agent of life-style will be terminated.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程 (社会学)

は じ め に

“生活”を研究するアプローチとして、「生活様式」(way of life; genre de vie; Lebensform; Lebensweise, etc.) 概念と「ライフスタイル」(life-style or style of life) 概念がある。前者は、人文地理学を始め、地域社会学、社会計画論、マルクス経済学などの専門分野において、活発に論議されている概念である。他方、後者は、消費者行動論、マーケティング・リサーチ、政治社会学、労働社会学などの研究者たちによって、生活主体の選択行為を説明する枠組として調査研究に盛んに応用されている。

概して、生活様式概念もライフスタイル概念も一括して、「特定の社会あるいは集団の成員である人びとが営んでいる生活の仕方」と定義されることが多い。両概念とも、狭義には、衣・食・住をめぐる生活手段の所有状況とその使用様式を指し、広義には、生活にかかわる価値や態度を含む包括概念として理解されている。いずれにしても、両概念が“手段的および価値的な意味での生活の営み方”を含意していることに変わりはない。

もっとも、生活様式概念とライフスタイル概念は、それぞれ異なる起源をもつ。生活様式概念の起源は、専門分野毎に研究者の主張が異なるため、特定することはできない。人文地理学においては、生物学の「生活形(型)」(Lebensform) 概念にその起源が求められている⁽¹⁾。また、社会計画論の立場からは、トマス・モア (T. More) の『ユートピア』においてすでに fashion of living という用語が使用されていたことが主張されている⁽²⁾。さらに、マルクス経済学者は、マルクス＝エンゲルス (K. Marx & F. Engels) が『ドイツ・イデオロギー』において、生産様式との関連で生活様式 (Lebensweise) を取り上げていたことを指摘している⁽³⁾。この他に、都市社会学においては、ワース (L. Wirth) の「都市的生活様式」(urbanism) 論に生活様式概念の原型が求められている⁽⁴⁾。

一方、ライフスタイル概念は、ヴェーバー (M. Weber) の “Lebens-

führung” 概念に由来している。彼自身、実際には「ライフスタイル」という用語を使っているわけではない。最初、Lebensführung は、パーソンズ (T. Parson) の英訳版において “life-attitudes” と訳されていた。だが、その後、ガースとミルズ (H. H. Gerth & C. W. Mills)⁽⁵⁾ がヴェーバーの用いる Lebensführung の意味する範囲を吟味した結果、その最も的確な訳語として “style of life” を当てた。これが英語圏におけるライフスタイル概念の始まりである。それは、1950 年代末のことであった。

さて、ヴェーバーの著作の邦訳版においては、Lebensführung は、それが使用される文脈に応じて、〈生活態度〉あるいは〈生活様式〉として訳し分けられている。⁽⁶⁾ 玉野和志によれば、Lebensführung 概念には、「階級状況」(klassenlage) を制約し、その貫徹を阻止するという意味で「身分」(Stand) との関連で述べられる側面と、通常因習的な〈生活様式〉がときとしてある種の経済構造の変革に対して、それを積極的に推進する側面とが含まれている。前者の文脈においては〈生活様式〉の訳語が、後者の文脈においては〈生活態度〉の訳語がそれぞれ当てられているのである。

玉野によれば、アメリカにおける消費者行動論やマーケティング・リサーチの研究者が使用している ライフスタイル 概念は、Lebensführung の〈生活様式〉的側面にかたよったものとされる。⁽⁷⁾ この指摘を考慮すると、現在ライフスタイル概念として定着しているものは、その起源をヴェーバーの Lebensführung 概念としながらも、その含意を十分汲みとって定式化されているわけではないことが理解できるだろう。また、このことが、ライフスタイル概念を生活様式概念と混同させているともいえる。

ライフスタイル概念の意義を明確にうちだすためには、ヴェーバーが、近代西欧社会に普及している“資本主義的生活様式”の原型として、特定社会層の〈生活態度〉——Lebensführung の構造変革的側面——に注目したことを忘れてはならない。“伝統主義”的な〈生活様式〉が、従来と同じ報酬を得るにはどれだけの労働で事足りるかという自足的なものであっ

たのに対し、産業的中産者層の“合理主義”的〈生活態度〉は、職業を「召命」(Beruf)とし職業労働に献身するというものであった。この産業的中産者層の〈生活態度〉こそが、近代化を推進する決定的な役割を果たしたのである。

本稿においては、ヴェーバーの Lebensführung 概念の含意を探ることによって、現在、定着しているライフスタイル概念の再定式化を試みたい。

I. Lebensführung 概念の2つの側面

——〈生活様式〉と〈生活態度〉の相互連関——

なぜに西欧においてのみ、固有の意味での合理化が進展しえたのか。ヴェーバーの社会学研究に一貫する問題意識は、この問いに集中している。とりわけ、合理化の問題が主題的に取り扱われたのは、『宗教社会学論集』であった。そこでは、経済的活動に対する宗教思想の影響、社会層と宗教思想との関係、西欧文明を他の諸文明から区別する諸特徴を分析し説明することに、ヴェーバーの知的関心の多くが注がれた。⁽⁸⁾

宗教社会学におけるヴェーバーの基礎視角は、一方に宗教思想を、他方に社会層の利害を置き、それらの相互関係に焦点を合わせて歴史の動力学を解明しようとするものである。史的唯物論によれば、理念はイデオロギーとして人間の経済的利害の反映であるとされるが、ヴェーバーにとっては、理念は利害の直接的な反映ではない。理念はたしかに利害によって規定されるが、それでもなお利害によって拘束されことなく生成し発展していくものなのである。しばしば引用される一節ではあるが、ヴェーバーは、理念と利害の関係を次のように言明している。⁽⁹⁾

人間の行為を直接に支配するのは、(物質的ならび観念的な)利害関心であって理念 (Idee) ではない。しかし理念によって作りだされた「世

界像」はきわめてしばしば転轍手としてその軌道を決定し、そしてその軌道の上を利害のダイナミズムが人間の行為を推し進めてきたのである。つまり「どこから」(wovon)「どこへ」(wozu)「救われる」ことを欲し、また——これを忘れてはならないが——「救われること」ができるのか、このことの基準となるものこそが世界像であったのである。

ヴェーバーは、理念と利害の関係を対応や反映ではなく、「選択親和関係」(Wahlverwandtschaft) の概念で捉えている。理念と利害の間には、最初から予定された対応関係はなく、歴史の過程における選択淘汰を通じて、それぞれが模索的に親和関係を発見していく。このような理念と利害の選択親和関係に注目して、ヴェーバーは、近代合理化過程の動力学を析出したのである。

さて、Lebensführung 概念の2つの側面——〈生活様式〉と〈生活態度〉の関係に注目して、近代合理化過程の動力学をさらに詳しく考察してみよう。

ヴェーバーは、歴史の変革主体として「社会層」(soziale Schichten) を想定した。ヴェーバー自身、社会層の概念規定をおこなっていないが、内田芳明によれば、社会層概念には次の3つの使われ方がある。⁽¹⁰⁾

(1) 「社会層」のもっとも素朴な意味は、それが「層」(Schicht) であるという点である。例えば、ヴェーバーが「支配者層」(Herrenschicht) などというとき、そこには「階級」や「身分」や、場合によっては「祭司」や「官僚」や「軍事的指導者」や「地主」やその他いろいろなものが含まれており、「社会層」は、幾分漠然とした包括的な性格をもっている。

(2) 「社会層」は、「身分」でも「階級」でもなく、両者を含んでさしつかえないが、むしろ別の基準に照らし使用されている場合がある。たとえば、『古代ユダヤ教』のなかでは、「ベドウィン」、「小家蓄飼育者」、「農民」、「都市」という社会層の「段階構成」(Skala) が、自然的・風土的条

件に強く左右されている「居住様式」や「生活様式」(Lebensform)に着目して使い分けられている。

(3) 「社会層」は、「階級」概念と「身分」概念を含みつつそれらの総合概念として使用されている。マルクスが「階級」に限定したのに対して、ヴェーバーはそれに「身分」を含めることに意義を見出し、「社会層」概念を構想した。

宗教社会学においては、主として第3の用法が採られている。経済秩序に起源をもつ財貨(富)の差異は階級をつくり、社会秩序に由来する名誉(威信)の差異は身分(集団)をつくる。⁽¹¹⁾ 社会的名誉の内容的差異は〈生活様式〉—— Lebensführung の構造固守的側面—— の形態をとる。⁽¹²⁾ もっとも、身分集団による生活の様式化は、観念的および物質的な財貨もしくはチャンスの独占を伴うため、たとえば、一定の財、騎士領、農奴または隷農保有地、一定の生業部門などが、身分的独占の対象となる。⁽¹³⁾ 身分的独占が強められると法制化されることもある。いずれにせよ、身分集団の〈生活様式〉こそが、階級と身分を総合し、社会層形成の契機となるといえるのである。

ヴェーバーは、社会層と宗教領域との連関を追求するにあたって、社会層の「利害関心状況」(Interessenlage) の重要性に注目した。⁽¹⁴⁾ 利害関心状況とは、端的に言えば、社会層が実際に置かれている観念的および物質的な生活問題状況である。社会層の利害関心状況を一般的に制約するのは、「階級状況」と「身分状況」(Ständische lage) である。⁽¹⁵⁾ 階級状況は、第一次的には、社会層の財産所有あるいは仕事の熟練度によって制約された生計および営利に関するチャンスを指し、第二次的には、そのチャンスから帰結する一般的・類型的な生活諸条件を指している。他方、身分状況は、第一次的には、社会層(身分集団)の〈生活様式〉によって、第二次的には、^ル支配権、収入ないし営利に関するチャンスをめぐる法的保証によって制約された、消極的ないし積極的な社会的名誉に関するチャンスである。

要するに、社会層の階級と身分を具体的に特徴づけるのが階級状況と身分状況であり、それらによって生じてくる生活問題が利害関心状況といえる。

社会層は、自らの苦難の問題である利害関心状況を問い直し、現世を貶価していく。苦難の問題に合理的にしかも真剣に取り組めば組むほど、この問題の現世における解決の可能性がなくなり、むしろ来世において解決を求める方が可能性をもち、意味のあることとされてくることから、苦難からの救済欲求が生じてくる。社会層は、苦難から（何から、もしくはどこから）、救済状態へ（何へ、もしくはどこへ）救われるのか、そうした基準を求めて宗教領域へと近づいていくのである。

一方、宗教領域においては、社会層の利害関心状況とは無関係に救済財が提示される。社会層の利害関心状況という問題に対して、救済財はその解答を用意する。もっとも、この救済財は、預言者や知識人が宗教固有の領域における生来の資質と個人的体験によって宗教理念を解釈した世界像である。それは、苦難から（何から、もしくはどこから）、救済状態へ（何へ、もしくはどこへ）救われるのかを明示した、救済の基準を提供するのである。

さて、一方で、各種社会層が提起した生活問題（利害関心状況）群と、他方で、預言者や知識人が提示した解答（救済財）群は、相互の選択親和関係において結合する。社会層は自らの利害関心状況に照らして、その解決に向けて解答を模索する。また、預言者は自らの救済財の大衆宗教性を獲得しようとしてその共鳴盤を見出せそうな社会層を模索する。両者の模索が、歴史過程における選択淘汰を通じて親和関係を発見していくのである。

社会層は、自らの利害関心状況と親和性のある解答を所与の救済財群のなかから選択することによって、独自のエートスを創発する。エートスとは、一定の方向づけをする救済財を核心にもち、行為への実践的起動力となる「生活倫理」である。社会層は、エートスに従って自らの〈生活態

度〉を救済財の指示する一定の方向に向けて形成していく。この文脈において形成された〈生活態度〉こそ、Lebensführung の構造変革的側面といえるのである。

身分集団の〈生活様式〉から出発して、社会層の〈生活態度〉へと発展していく過程を図解しておくと、図-1 のようにまとめることができるだろう。

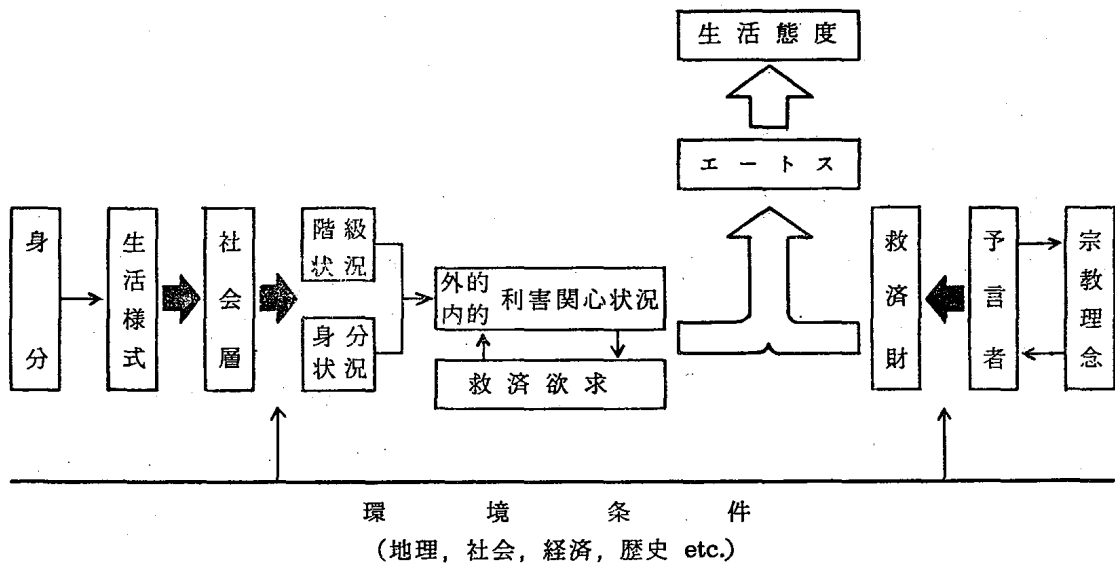


図-1

社会層の威信的上昇は、その時々⁽¹⁶⁾に上流社会層を風靡している流行へ服従することによって達成される。これは、威信の低い社会層が上流社会層の威信のシンボルを占有侵奪することに他ならない。社会層が威信的上昇を果たすことによって、従来の因習的構成は再編成される。さらに、新たな因習的構成が慣例化し、社会層の経済力の分配も安定化すると、当該の社会層は、自ら回復した威信を法的に保障することができる。したがって、従来の慣習化した〈生活様式〉から出発して、独自の〈生活態度〉を形成した社会層が法的権利を獲得するためには、経済的基盤の確立はもとより、上流社会層の流行を模倣し、自らの〈生活態度〉に威信を付与することが必要不可欠なのである。

首尾よく成功した社会層の〈生活態度〉は、それが発生した社会層の枠を超えて社会全体に普及していく。近代合理化過程においては、産業的中産者層の“合理主義”的〈生活態度〉が西欧全域に伝播し、いわゆる“資本主義”的生活様式が確立したといえる。

このように、ヴェーバーは、近代西欧社会において慣習化している〈生活様式〉の起源を特定社会層の〈生活態度〉にもとめ、それが歴史的に発展し、所与の社会構造を変革していくダイナミズムをあとづけようとした。伝統社会から近代社会への変化は[・]齊一性によって特徴づけられるのに対し、現在生起しているポスト・モダンの変化は[・]多様性によって特徴づけられるという違いはあるものの、ヴェーバーの Lebensführung 論は〈生活様式〉が転換する基本原理として現代にも応用できる枠組と思われる。

Ⅱ. ライフスタイル論の展開とその概念規定

——生活システム論の視点から——

前述のように、ヴェーバーの Lebensführung 概念は、アメリカの消費者行動論やマーケティング・リサーチの研究者たちによってライフスタイル概念として継承された。ライフスタイル概念は、消費者の商品選択、店舗選択、銘柄選択を説明する枠組として、従来の人口学的諸要因（年齢、性別、居住地域など）や社会的経済的諸要因（所得、学歴、職業など）にとって代わって登場したものである。⁽¹⁷⁾

消費者行動やマーケティング分野におけるライフスタイル論者の多くは、レイザー (W. Lazer)⁽¹⁸⁾、レヴィ (S. J. Levy)⁽¹⁹⁾、ムーア (D. Moore)⁽²⁰⁾ の概念規定に依拠して調査研究を展開している。彼らの概念規定は、1963年における米国マーケティング学会 (AMA) の冬期大会で提示されたものである。レイザーは、ライフスタイルを「全体社会ないし社会のセグメントに特有の、他から区別される生活様式」として理解し、レヴィは、ライフ

スタイルを「個人のセルフ・コンセプトの規定，すなわち現実的自己と理想的自己についての信条や観念のセット」と定義した。また，ムーアによれば，ライフスタイルは，「家族成員がさまざまな商品・出来事・資源を家族生活に適合させてゆくパターン化された生活の仕方」を意味する。三人三様，概念規定をめぐる一致は必ずしもみられない。

消費者行動研究においては，次の5つのアプローチが「ライフスタイル分析」と銘打って採用されている。⁽²¹⁾つまり，「行動ライフスタイル」アプローチ，「ベネフィット・セグメンテーション」アプローチ，社会趨勢アプローチ，A. I. O. アプローチ，サイコグラフィック・アプローチである。これらの消費者類型論に共通してみられるのは，研究者のカンと経験を頼りにライフスタイル変数を列挙し，即調査に移るという，モデル構築のプロセスを全く無視した姿勢である。この分野においては，他の領域に比べて膨大な調査データが蓄積されているにもかかわらず，理論的整序が依然として進んでいないのは，このような研究上の限界によっている。

さて，ライフスタイル概念そのものに焦点を置いて精緻化しようとする試みは，社会学における生活システム論の立場から展開されている。ライフスタイル概念を初めて日本に導入した井関利明（1979）によれば，ライフスタイルとは，「生活主体が，① 生活の維持と発展のための生活課題を解決し，充足する過程で，② みずからの独自の欲求性向から動機づけられ，③ みずからの価値態度，生活目標，生活設計によって方向づけられ，④ 外社会（企業，政府，地域社会など）が供給する財・サービス，情報，機会を選択的に採用，組み合わせ，⑤ 社会・文化的な制度的枠組からの制約のなかで，⑥ 日々，週，月，年あるいは一生のサイクルを通して，能動的，主体的に設計し，発展させていく，⑦ 生活意識と生活構造と生活行動の三つの次元から構成されるパターン化したシステム」と定義される。⁽²²⁾井関の定義においては，ライフスタイルそのものを生活システムとみなすところに特徴がある。だが，最近では，生活システムとライフスタイ

ルとを厳密に区別しようとする傾向がある。

松本康 (1985) は、まず、生活システムと生活構造を次のように概念規定する。⁽²³⁾ 生活システムとは、「個人 (生活主体) が自らのうちにもつ価値パターン (生活価値パターン) にしたがって、個人や集合体などの社会的諸関係 (生活諸関係) をとり結び、あるいはこれに参加し、こうした関係を媒介として、生活諸資源を獲得・変換・享受するという生活行為のシステム」である。他方、生活構造とは、「生活諸関係のパターン」、すなわち、「生活主体が日常的にとり結び、参加している社会的諸関係の集合」を指す。

上記の概念図式にもとづいて、松本は、ライフスタイルを「マクロレベルにおいては生活システム全体の一定の構造化された状態」としながらも、「ミクロには、生活主体が社会・文化的諸条件に対して選択的に適応した結果生じるものであって、ライフスタイル概念の有効性は、この適応過程で形成され、やがて生活の再生産の動因となるような選択のエートスを抽出するところにある」⁽²⁴⁾ としている。そこでは、ライフスタイルは、「生活価値パターンに依拠した、諸関係および諸資源の選好パターン」と定義される。⁽²⁵⁾ 彼によれば、生活諸関係には、① 他の諸個人との社会的諸関係 (社会的ネットワークへの参加)、② 集団・組織などへの成員としての参加 (集団への所属)、③ 自らが成員ではない集団や組織との社会的諸関係 (鈴木栄太郎のいう「人と機関」との関係) が含まれている。

また、生活諸資源とは、「生活諸関係を媒介として生活主体が獲得・享受するところの欲求充足の手段もしくは対象」⁽²⁶⁾ とされる。生活諸資源には、次の4つのものがある。① 物的・経済的資源 (物財・サービス財など)、② 社会的・関係的資源 (威信・権利など)、③ 心理的・関係的資源 (是認・愛情など)、④ 文化的・情動的資源 (知識・技能など) が挙げられている。

ここではまず、生活システムを次のように定義しておこう。生活システムとは、「生活主体が、自らの社会的地位に典型的な生活様式を維持・発

展していくための生活問題を解決する過程において、自らの生活欲求から動機づけられ、自らの生活価値によって方向づけられ、生活諸関係を取り結び、その関係を媒介として生活諸資源を獲得・変換・享受する生活行為のシステム」である。生活システムの概念規定のなかの、「生活様式」、「生活問題」、「生活欲求」、「生活価値」、「生活諸関係」の説明にも若干触れておこう。なお、「生活諸資源」については、松本の分類に従いたい。

① 生活様式は、社会的地位に付与された、消極的ないし積極的な威信を日常生活において象徴化する仕方を指す。これは、Lebensführungの構造固守的側面である〈生活様式〉と同じものと考えてよい。

② 生活問題とは、社会的地位に制約された、生活主体の内的・外的利害関心状況である。これも、ヴェーバーが用いたものと同じ内容を含む。

③ 生活欲求の分類の仕方には多様な学説がある。例えば、マズロー(A. Maslow)に従うと、生理的欲求、安全欲求、愛情欲求、尊敬欲求、自己実現欲求に分類することができる。しかしながら、これらの欲求は、「必要からの解放」がまだ大きなテーマとなっているような人びとの欠之感が前提となっている。したがって、欠乏動機という発想が基底にあるといえるだろう。豊かな社会が到来して自己実現欲求が叫ばれるようになった昨今においては、欠乏動機よりむしろ差異動機を前提とした新たな欲求分類が必要だろう。

④ 生活価値とは、ヴェーバーの宗教社会学の文脈でいえば、預言者や知識人の提示した救済財に当たる。生活価値は、生活問題の解答となるような、首尾一貫した人生観（生活目標）といえる。

⑤ 生活諸関係とは、生活主体が他の主体ととり結ぶ関係である。それには、次の4種類の関係を含めることにしたい。(1)他の生活主体との(制度的な)社会関係(親子関係、夫婦関係などの社会的ネットワークへの参加)、(2)他の生活主体との(非制度的な)個人的関係(恋愛関係、友情関係などの個人的ネットワークへの参加)、(3)組織・集団などの集合主体

(職場の組織・集団, 地域組織・地域集団, 自発的結社など) への成員としての参加関係, (4) 企業, 政府, 地域社会などの物財・サービス等の提供主体との外的・社会関係。

生活構造とは, 生活諸関係および生活諸資源のパターンであり, 生活システムのストック的側面である。行為水準でいえば, 生活構造は, 生活問題の解決過程において選好された生活諸関係および生活諸資源が, 次回的生活問題解決のために維持・管理されている側面にあたる。

さて, ライフスタイル概念を, あらためて次のように定義しておこう。ライフスタイルとは, 「生活主体が, 自らの社会的地位に典型的な生活様式を維持・発展させていくための生活問題を解決する過程において, 自らの生活欲求から動機づけられ, 自らの生活価値によって方向づけられパターン化する, 生活諸関係および生活諸資源を選好するエートス」である。もっとも, 価値そのものも文化的対象とみなされるため, 生活価値も究極的には選好の対象となる。ライフスタイルは, 行為水準からいえば, 生活問題の認知・評価, あるいは生活諸関係および生活諸資源の新たな獲得という側面にかかわる。したがって, ライフスタイルは, 生活構造から相対的に独立し, また, 旧文化システムに包絡された生活様式に制約されるものでもない。それは, 新しい文化システムに強くコミットした生活行為への実践的起動力となるような, 選好のエートスなのである。

個人レベルにおいて形成されたライフスタイルは, 社会層のライフスタイルとして集合的に共有されてはじめて, 社会構造を変革する力となる。同じ社会的地位を占有し, 同じ生活問題に苦しむ人びとは, 同じ生活欲求から動機づけられていれば, 同じ生活価値に親和性を示し, 同じライフスタイルを形成しやすいといえるだろう。このことは, 同じ社会的地位を占有する人びとでも, 生活問題や生活欲求の内容が異なれば, 異なるライフスタイルを形成する可能性もあることを示唆している。したがって, ライフスタイル形成の可能性は, 必ずしも社会的地位によって決定されるもの

ではない。

社会層の威信的上昇は、ヴェーバーが指摘しているように威信集団における流行に従うことによって達成される。もっとも、現代のように価値が多元化している状況においては、社会において唯一の威信集団が存在するというよりむしろ、それぞれの価値ごとに威信秩序が編成され、威信集団が存在すると考えるべきだろう。したがって、流行そのものも小規模化し、また、短期化すると考えられる。

威信集団のシンボルを占有侵奪した社会層は、前節において述べたように、因習的構成を事実上慣例化し、経済力分配を安定化することによって、自らの威信を法制化することができる。結局、生活世界において形成されたライフスタイルが社会システムに構造化されてはじめて、生活主体による社会変革は完了するのである。

む す び

以上、みてきたように、生活様式もライフスタイルも、人びとの手段的および価値的な意味での生活の仕方を指す概念である。しかしながら、生活様式においては、人びとの生活目標となる生活価値が社会秩序において妥当するものとして組み込まれているのに対し、ライフスタイルにおいてはそうではない。というよりむしろ、ライフスタイルを方向づける生活価値は、生活主体が従来の生活様式を方向づけている生活価値を問い直す過程で生じてくる生活問題と親和的な解答としての意義をもつ。それは、生活主体の新たな生活目標として位置づけられることによって、生活行為の実践倫理(エートス)即ちライフスタイルを創造するのである。それゆえ、ライフスタイルには、社会の目的を問い直し、その変化の方向を模索し、新たな秩序形成を試みようとする生活主体の、日常生活における柔らかな抵抗が含まれているといえるだろう。

注

- (1) 松田 信, 1961, 「生活様式論再考」, 『人文地理』第 13 巻第 6 号.
- (2) 橋本和孝, 1987, 『生活様式の社会理論—消費の人間化を求めて』東信堂.
- (3) 成瀬龍夫, 1983, 「生活様式 of 概念」, 『彦根論叢』第 222・223 号.
- (4) Wirth, L., 1938, *Urbanism as a Way of Life*, A. J. S. Vol. 44.
- (5) Girth, H. H., & Mills, C. W., (trans. eds.), 1946, *From Max Weber: Essays in Sociology*, Oxford Univ. Press.
- (6) 玉野和志, 1987, 「地域における社会層分化の分析視角」, 『ソシオロギス』No. 11., p. 121.
- (7) 同書 p. 126.
- (8) Bendix, R., 1960 (1962), *MAX WEBER: an intellectual portrait*, Doubleday & Company Inc. (Anchor Books edition), (折原浩訳『マックス・ウェーバー—その学問の全体像』中央公論社, P. 246.)
- (9) Weber, M., 1920-21, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, 3 Bde (大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』みすず書房, P. 58.)
- (10) 内田芳明, 1968, 『ウェーバー社会科学の基礎研究』岩波書店, PP. 205-8.
- (11) Weber, M., 1925, *Wirtschaft und Gesellschaft*, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen, (浜島朗訳『権力と支配』みすず書房, P. 217.)
- (12) 同書 P. 227.
- (13) 同書 PP. 232-4.
- (14) 内田芳明, 前掲書 P. 220-8.
- (15) Weber, M., 『宗教社会論集』PP. 94-6.
- (16) Weber, M., 『権力と支配』PP. 228-9.
- (17) 井関利明, 1979, 「ライフスタイル概念とライフスタイル分析の展開」, 村田・井関・川勝編『ライフスタイル全書』ダイヤモンド社, PP. 4-5.
- (18) Lazer, W., 1963, "Life Style Concepts and Marketing", in S. A. Greyser, ed., *Toward Scientific Marketing*, AMA, PP. 130-9.
- (19) Levy, S. J., 1963, "Symbolism and Life Style", in S. A. Greyser, ed., *op. cit.* PP. 151-63.
- (20) Moore, D. G., 1963, "Life Styles in Mobile Suburbia", in S. A. Greyser, ed. *op. cit.* PP. 151-63.
- (21) 井関利明・堀内四郎, 1977, 「『生活の質』と『生活者』の類型」, 村田・丸

生活変動と「ライフスタイル」

尾・井関編『福祉志向の論理—続「福祉生活の指標を求めて」』有斐閣, PP. 70-80.

- (22) 井関利明, 前掲書 PP. 15-6.
- (23) 松本 康, 1985, 「現代社会の社会変動とライフスタイルの展開—生活システム論の視点」, 『思想』第 730 号, PP. 279-80.
- (24) 同書 P. 280.
- (25) 同書 P. 280.
- (26) 松本 康, 1981, 「生活体系論序説」, 『ソシオロギス』No. 5, P. 41.

参 考 文 献

- ・安藤英治編, 1977, 『ウェーバー; プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』有斐閣新書.
- ・徳永 恂編, 1979, 『マックス・ウェーバー著作と思想』有斐閣新書.
- ・Weber, M., 1920, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie.*, (大塚久雄・生松敬三訳『宗教社会学論選』みすず書房, 大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波書店).
- ・Weber, M., 1921, “Sociologische Grundbegriff”, *Wirtschaft und Gesellschaft, Grundriss der verstehender Soziologie.*, (阿閉吉男・内藤完爾訳『社会学の基礎概念』恒星社厚生閣).

その他.